

対談 中村 實 / 江間 忠

## 医療の本源と再生を求めて歩んだ三五年

自撰論説集編纂を終えて

中村先生が過去に小社から出版した九冊の本、昭和四三（一九六八）年に技師会会長就任後約一〇年間にわたっての論説をまとめられた昭和五二（一九七七）年刊行の『明日への旅立ち』をはじめ、最近では平成二二（二〇〇〇）年刊の『明日に刻む対話』に至る単行本があるわけですが、これら既刊本のほとんどはいまとなつては入手困難なものもあり、まして全巻を通読するのは至難であると思われる。中村先生のそれらの単行本に収められた諸論説は、そのまま技師会の歴史をなぞるように読めるものであり、また現在よりもより将来にわたって医療に内在する問題や課題の今日性を失つておらず、非常に迫真に富んだものであります。そこで、これら九冊のなかから論説を精選して、書かれた年代順に一冊にまとめようという編集方針で本書の制作を進めてまいりました。

それで、中村先生と期を等しく技師会の事業を一緒にやってこられ、この編纂を通じ査読にご協力いただいた江間先生に加わっていただき、本書の編纂を終えたいま「あとがき」に代わるものとして、ざっくばらんに感想をお聞きかせ願いたいと思います。昔の話も含めまして、こういった歴史を若い方々に伝えていくことがこれからは非常に意義があるということで、大いに将来を意識した昔語りをしていただければ幸いです。江間先生は、中村先生が技師会の会長になられた翌年の昭和四四（一九六九）年から、常務理事として二〇年にわたり技師会雑誌の編集をつとめてこられました。その後平成二二（二〇〇〇）年に至るまで八年間監事として執行部を指導し、文字どおり中村先

生とともに歩いてこられたわけですね。

**江間忠** 技師会創立五〇周年を記念して平成九年に出版された『50年のあゆみ』の座談会でも話したことです。中村先生が昭和四三年に会長を引き受けるまでは、とにかく技師の身分をなんとかしようという運動でもちきりだったのが、中村会長になられると技師法改正がただちに成立し今日の診療放射線技師という資格が定まり、これを機に日本放射線技師会そのものが生れたと言っても過言ではないと思います。そして今度は技師の教育制度の問題や卒後教育、海外交流、患者に対する役割や責任など、現在のテーマの原型がかたちづくられることになり、われわれも日常勉強しながら実務につくという状態がそのときからはじまったわけです。

『明日への旅立ち』を読むとその経過がよくわかります。これはぜひ会員の方々にもう一度読み直していただきたい。温故知新といいますが、時間の流れは早いのですけれども、この時代のいわば苦難の歴史というものが実に胸に迫ってきます。この本をはじめとして、以来近年に至るまでの九冊にわたる単行本のなかから、主だった論説を編年体で一冊にまとめてみたらどうかということで、私に査読の話をいただいたときも、果して私が適任かどうかわかりませんけれども、一応ずつと先生と一緒に技師会の仕事をさせていただいて、まあ後をくつついて歩いていただけました。日本放射線技師会の歴史というのは、なんでも自分たちで考えて自分たちでつくり上げてきた歴史なんです。少なくとも、技師法が改正されて以後の歩みというのはそういうかたちだと私は思っております。

**中村實** 『明日への旅立ち』というのは、会長になってから会誌などに書いていたものをまとめたもので、いまからみるとその当時の約一〇年間の記録になっています。以来平均して二、三年間隔でこうした書籍を刊行してきました。会長になる以前には、研究するのが目的の生活だったんですね。研究というのは実験をやつてその成果をまとめ、学会誌に論文を発表するというのがひとつの仕事なんです、そういう習慣がずっと続いていたら、その研究の仕事をやめて技師会という仕事に没頭していても、このままでは何も残らないということに気がついたわけです。自分のやったことに対して何か残していかなければいけないと。研究でものを書く延長で、技師会の仕事に対してもまとめていこうとい

う意志が九冊の本に連なってきたわけです。

今回これらをまとめようということになったのですが、江間先生にも大変お世話になってしまいました。自分で読み出すと、ともすれば昔を懐かしんで読んでしまいますからね。書いたものそれぞれに思いが強いものだから、自撰といつても捨て難いものが多くなって、一時は七百ページくらいにまで増えて編集者を慌てさせてしまいましたね。だから第三者にも読んでもらい、客観的な視点も入れてもつとスリムなものにしないとよいものにならないというので、それには江間先生が一番適任じゃないかということでご助力願ったわけです。

「はじめに」にも書いたけれども、自分が会長になったときに「なんだこの会は」という気持が最初あったわけですが、自分の職業が社会からかけ離れてしまっている。これをなんとかしなければいけない、ということからスタートしている。それはなぜかという、放射線技師の場合、医療のなかで徒弟制度の時代が長くて教育が貧困であったことから、他の医療職に比してもい로운な問題があった。そういうあまりにも大きな問題を一つひとつ解決していこうとしてきたわけです。いまは資格法と言っていますが、当時は昭和四三年に技師法が改正されたと言っても五八年に至るまで一五年間身分は二本立てであったし、その後平成五年に三回目の法改正をして業務拡大やチーム医療、守秘義務を明記させてきたことも、その究極の目標は技師法の抜本的改正にあった。こう身分格差が医師との間にあったのでは、日本の医療はダメになるというのが私の信念でした。

そこで基本となる問題はいま申し上げたように技師教育にあるわけで、そうすると教育の問題は制度の問題に行き着き、最終的には大学教育でなければいけないということに到達する。その到達する間に必要な歩みを常に訴えてきたわけですね。その訴えるなかから新たな矛盾が出てくる。その矛盾をどう乗り越えていくか。そうした山積する問題を一つひとつつぶすことによって前進してきました。また、これからの時代にはもつと世界を知ることが自分の国を知ることになるということから、一人でも多くの人たちに国際会議の経験をしてもらうとか、いろんなことをやってきた。そういうことから、この本でもお付き合いした人の名前がたくさん出てくると思うんですけども、人間一人の力というのは限られたもので、その人たちにはそのつどお世話になっているんですね。また信念がないとそういうこともでき

ない。信念を持ってやってきたからこそ教育センターや大学もできた。ずいぶん反対もされて嫌な思いもしました。しかしいま振り返ってみると、三五年というのはまったく茨の道を歩いたとも言える。茨の棘が刺さりながら、痛みを感じつつ歩いてきた。これでもかこれでもかと、ときには血が出るのを押さえながら、でも目的のために歩んできたということが言えると思う。

江間 技師会の歴史は『50年のあゆみ』などを読めばある程度わかるかもしれませんが、その歴史と一緒に流れてきた精神や当時の切実な思いというものの、これらを一貫して理解していくには、やはり当事者である中村先生の書かれたものを読んでみてはじめてわかりますね。

それにはもちろん先生がいろいろ会を指導してご苦労なさったわけですが、それを技師会のまわりの方々で手をさしのべてくれた方も大勢いらっしゃる。そういう人たちのおかげで頑張つてこられたというお話だったんですけれども、その謙虚なお気持、これはやはり大事なことで、技師会はただがむしゃらに「これをやらなきゃいけない」ということだけで歩んできたわけじゃなくて、周囲の方々の理解を得つつ、会長として努力をなさってきたことで、いまの技師会が成り立っているんだということ、やはりそれは大事なことですな。

中村 そうですね。よく会のために自分を捨ててと言ってきましたが、いろいろなことを実現していくには、家庭もそうなんです。自分を完全に捨ててしまつて、会をよくするために、会がよくなるためにと燃焼してこなければならなかった。それは簡単に言葉で言えますけれども実行となるとなかなか難しいことなんです。しかし、会員の支えとそのつどお世話になった周囲の人たちの理解が、自分を突き動かす大きなエネルギーにもなりなぐさめにもなつてきましたな。

江間 それだけに先生が、「何をするのでバツクに技師会員がいて支えてくれるから、技師会のために何もかも捨てて働けるんだ。何も怖いものがないんだ」と言われた言葉が、本をずっと読んでいけばそういう精神が貫かれているのを感じるんですな。また、どの問題にしても、それを克服して実現させていくのに一年や二年で成り上がったものはないんです。みんな一〇年一五年と経っているんです。まず大学をつくらうと言ってから大学ができるまで、本当に一

〇年二〇年と経っているんです。だから会の意味をまとめるだけではなくて、先生はその志をかたちにしていって大きな事業をなさったという感じがするんですね。

**中村** 自分で意識的に計画してなくても、人間はひとつのものに突っ込んでいくとそうやっていくんじゃないかと思うね。だんだん枝葉が分かれてきて、それがある時期になると集約されてひとつのものをかたちづくっていくということだと思っんです。それと、愚痴を言っていたらきりがなくて、私は人間関係でも非常に恵まれた環境にあったと思いますね。ひとつの大きな事業に手を付けて、行き詰まるんです。そうすると、何か不思議と道が開ける。行き詰まらなないと元気が出ない。壁にぶつかるのと、よしやってやるうという、その壁をぶちやぶろうという勇気が湧いてくる。

話はさかのぼりますが、江間先生が常務理事になられた昭和四四（一九六九）年に、第4回 I S R R T（世界放射線技師会）東京大会が開催されますね。それまで鎖国状態だった技師会の開国元年とよく言われます。

**江間** 当時まだ国際会議というのは本当に限られた、例えば政府だとか、学者の集まりくらいなもので、一般の医療のなかでもコ・メディカルの人たちの会議というのはなかった。そこで、前年の法律改正によって新しい制度に移行したと同時にこの大会を持ったというのは、すごくわれわれにとってインパクトを与えましたね。自分自身でそれこそ脱皮しはじめたという感じがしましたね、それまでの殻を。先生はよく脱皮しろっておっしゃってましたけれど、本当にそういう機会を与えてくれましたよ。

それと同時に、当時の佐藤首相や木村官房長官といった一流の政治家と先生との間に独自の親交があつて、そういった方々を中心に、政府も技師会がこういう大きな国際会議を持つことを応援してくれたということ、これが当時の放射線医をはじめ医療界全体に与えたインパクトははかりしれないと思います。そこで、われわれ技師は医療のなかのほんの一部の小さな存在だと考えていたところが、こういう大会を開くことによって主体性や自立性に目覚めさせてくれたという面もありますね。かげには苦勞がありますけれども、しかし当時は極端に言えば国全体が注目してくれたというほどの一大イベントでした。これをやったのはやはり技師会であり先生の努力だったんですね。これでわれわれは目が

覚めたという感じがしましたね。

中村 確かに世界会議がそういう門戸を開いたのでしょね。

江間 私はね、技師会の役員になって役立ってきたんじゃないんです。技師会雑誌の編集の仕事を任されて逆にいろいろ教わったんです。本当に視野が全然違っちゃったんですよ。それが歴史だったんですね。これは先生にめぐりあえたということが一期一会だと私は思っています。その瞬間から思いました。少々辛いことがあっても、なんでも一生懸命できる範囲でやろうと。だからちつとも役に立ってなかつたんだけれども、編集の仕事をしていて一番うれしかったのは、昭和五八年に横浜でAA会議があったとき、WHOからラコビー又先生がいらつしやいましたね。あのときに先生がラコビー又先生と対談したり、その後いろんな話をうかがって編集の仕事させていただいたときに、「ああ、技師会はこのまできたのか」と、本当にこの仕事をしてきてよかったという感じがしましたね。もちろんそれまでに昭和五四年の教育会館の設立とか、そういう感動もありましたけれども、とにかく技師会に入って、自分自身が非常に啓発されました。それから主体性を持たなければいけないということを、いつも先生に言われていたということですね。それで私はなんとか技師会とともに歩んでこれたのではないかなと思っています。だから技師になって非常によかつたなと思っていましたね、こういう先生や会にめぐりあえたということが。

それから先生とのお仕事は、何によらずそれが夢のような話であっても、それを実現させる努力に対し決して運がなくてくるんです。運がいいからどうかなるんじゃないんですよ。その努力に運がついてくるんだ。平成元年に鈴鹿に新しい教育センターができたときも、できるまでのさまざまなお金の工面などにも非常に運がついているような印象を受けるんですね。運じゃないんです。先生の努力が運のようになって実現してくる。だから役員たちは不思議だと言っていた。これは教育会館もそうだし世界会議もそう、みんなそうです。それから統一講習会にしたってそうです。これはやはり先生の努力のたまものだったということですね。これはお世辞でもなんでもなく、私が常務理事に入れていただいでからずつと見てきて感じていることですね。

中村 よく私は夢を見ようということを言っていたんですよ。夢を語ろう、と。人間が見る夢というのは、生きた人が

見るのは正夢なんです。本当の夢というのは消えていくわけですから。私の言う夢というのは、実現可能だから夢なんです。そういう夢を大に見ましようというのがいまの話ではないですかね。

会長になる前によく欧米へ行かれては技師会雑誌にレポートを発表されていましたが、チーム医療、ペイシエント・ケアといったことについて、相当そうした外国での視察の影響があったのかなと想像しているのですが。

中村 その頃は欧米の病院へ行くと日本の技師と全然違うんですよ。患者を大切にするという医療の基本ができています。ああ、これがペイシエント・ケアかということと、それと技師が専門職としてのプライドを持っている。病院側からも技師がプロとして非常に評価されている。とにかく患者を大切にしようというのが徹底しているんですね。イギリスに行くと技師学校を見ても、きちんと医療人としての教育が行われているから、学校教育というのはこういうことかと思つた。日本では技術者、それも職工を養成するような教育しかやられていませんでしたからね。だからおっしゃるように外国からは相当刺激を受けたし、その思いは基本的にはいまま変わっていませんね。なにしろ日本ではいまだに口ばかりで患者の方を向いていませんからね。

江間 だけれどこうやって技師会でいろいろやってきましたけれども、やはりいつでも心に残っているのが、患者さんへのペイシエント・ケアや思いやり、被ばく線量の低減、これが必ず入っている。この本でも初期の頃から訴えておられますね。それは、技師の本来の医療人としての自分を忘れてはいけない、それから被ばく低減の問題も技師の特性を忘れてはいけないということに常に触れていると感じましたね。この被ばく低減については、日常の仕事のなかでどんなふうに軽減に努力しているのか、それこそ先生が「脱放射線」とまで言わなければいけないというからには、まだ技師は患者さんに対し、たとえ微量でも放射線を浴びせない努力をしているという姿が見えていないんだということでしょうね。

中村 まったくそのとおりですね。結局日本の技師の一番の欠点は、教育の欠陥から看護やその精神がなおざりにされ、患者を忘れていることにあるんです。医師は医師で患者を忘れて威張り散らしている。放射線の医師も患者者に対して威

張る、技師の前で威張る。日本の病院そのものがそうなんだけれども、技師だけでも患者のために被ばくも減らそう、ゼ口に近いと努力をすることが患者を大切にすることに結びつくんですけれども、それを忘れてしまっている。それに対しては医師も黙っている。俺の命令だから従えという発想だから、ますます悪くなっている。技師の役割は患者さんを大切にすることに尽きるんですよ。それを忘れ機械に熟中して、どうだすこいだろうとあたかも自分の手柄のようにしている。線管理にしても医師の命令に従っているだけのことであれば意味をなさない。それより問題は法律を抜本改正すること。医行為以外の線管理は技師の仕事だ、というふうにしてしまえばいいんです。これからの若い技師はそうなってくるかもしれない。いまの古い人たちの言うことは聞かないと思うんですよ。いまのような技師になりたくないわけですよ。やはり自分たちははっきりと専門のプロフェッショナルという立場を確立して、線管理などは技師の当然の業務範囲だと、逆に医師に注意するぐらいの権威を持たないといけないんです。

**江間** そういう意味でもぜひこの本を若い人に読んでもらいたいですね。教育が大事だということを叫んできて、立派な大学ができてきているけれども、やはり底に流れるものは患者中心ということですよ。それがこの本の精神として貫かれている。そのために大学も作ったのですからね。

**中村** 大学ができて、どういう時代が来ようとか一番大事なのは患者を大切にしようということだと思えますね。患者のための職業だという意識を持っていればどんな時代が来ようとか生きのびていける。被ばく低減の運動にしても、医師の指示が前提としてある以上だめなんです。技師がその判断を担って医師にサジェッションする立場にしなければならぬ。ところがいくら放射線に無知な医師に対してもそれはできない。そしたら法律がまずい、それに手を付けようということにならなければ。

**江間** 医師に、この検査は必要があるかどうかということと言える技師でなければいけないですよ。  
**中村** そうそう。

会長になられた直後から先ほどのISRRRT東京大会をはじめ、AA会議といった国際的な交流が表立って盛

んになるわけですけれども、昭和六〇（一九八五）年の教育会館のWHO研修センター指定にはじまり、平成六（一九九四）年にはISRR T第11代の会長就任、そしていまだ記憶に新しい平成一〇（一九九八）年に再度三〇年ぶりに日本で行われた第11回ISRR T世界大会、その間の中国との長い交流もありますね。そうした国際交流の三五年間を振り返ってみるとどういことが言えますか。

中村 ISRR Tには昭和三七年に開催されたモントリオールの第2回世界大会のときから放射線技師としてはじめて参加し、歴代会長なり役員の人たちとお付き合いしてきた。たとえば皆さんよくご存知のポジョニングのK.C.クラークという人がいるわけですが、彼女とも大変親しくなって、国際会議があれば必ずそういう人たちと会うことになっていた。ちょうどヨーロッパに行ったらK.C.クラークが入院したということで、病棟に見舞いに行ったことがあった。日本の遠い国からわざわざ自分の見舞いに訪ねてくれたと大変よろこんでいただいたことがありましてね。人情というのは万国共通のものなんです。だから国際交流というのは、表向きの格好だけつけているということではないと思うんですよ。人間というのはそういうのを見通してしまっわけですから。お付き合いをしていくのなら誠心誠意をもって尽さなければ、ああこの人は表面的な人かと思われてしまえば実のある交流は結べない。国際交流ではいろいろありましたけれど、結局は私の行動を世界は見ていて、それがISRR Tの会長選挙のさいに世界の八〇%以上の票につながったというのが実感ですね。本当は大学の方が忙しくて立候補することにもだいぶ迷ったんですけど、歴史的なお付き合いからすればやむを得ないかなということでも立ちました。

それからはなんとか世界の会をよくしたいということから、すぐに教育センターへ世界のボードメンバーを集めて二日間会議をやった。しかしどうも会議の要点がいつもずれるわけですよ。私の考えていることとヨーロッパの皆さんが考えていることとの間にかんりのギャップがある。患者に対しては日本と違ってポリシーははっきりしていますけれども、日本と同じように医師に対してはやはり弱い。そのへんが明らかに出てくる。彼らの教育制度も決して高いわけじゃないから、やはり日本は日本で大学をつくって、アジアのリーダーになっていくことが大事だと、それが世界に広がっていくようにしなければならぬと、会長になってはじめて身にしみた。ボード会議を世界会議とは別にやっ

たりして、大変に画期的だということで評価されたわけですけど、その中身に関してはもうひとつなんです。その点は寂しく感じています。

その後モローロッパの人たちのやり方を見て、医学会を立てて自分たちは手足だという発想がどこかに出てくるわけです。それではこの会がよくなるというところで悩みましたが、しかし任期が四年と決っている。先ほど江間先生から、一〇年二〇年がかりでかたちをなしてきたというお話がありました。四年では何をやるにしても短いんですね。しかしいまだに各国から個人的な手紙が来ていて、それに対していろんなアドバイスをしており、最近では世界の人たちにも技師が独立していかなければいけないという雰囲気徐徐にできてきたという感じはしていますね。それは自分が会長を四年やって少しはわかってきたかなと思う。なんといっても集まる機会が少ないですからね。年に二回か三回集まるだけでなかなか意思疎通がはかれないという、国際交流に特有の欠点があるわけですから。WHOの関係ももう少し深入りしていかなければいけないけれども、しかしWHOにしても医師中心に考えており、ISRRRTの意見はいまひとつ反映されないというくらいはありますね。そのへんをよく見極めて、どう展開すればいいかなあという感じを実は持っているわけです。

ところで、昭和五四（一九七九）年に東京に教育会館が竣工して卒後教育が本格化し、主だったところでは昭和五七（一九八二）年の一年間にわたる短波放送によるセミナー、昭和五九（一九八四）年の臨床実習指導者認定制度の発足、翌昭和六〇（一九八五）年のX線発見九〇周年記念からはじまる全国放射線技師総合学術大会、そして平成元（一九八九）年に会員の八〇%以上が参加するという驚異的な実績を残した全国統一講習会と、技師の生涯教育を徹底させる下地が着々とつくられてきました。そして何よりもこの本を通じて感動的なのは、教育会館が平成三（一九九一）年には大学が開学を迎えるシーンなんです。いろんな山があるんですが、とりわけそういう印象を持ちました。

中村 結局技師会としていろんな事業やってきて、それは最終的には教育制度の整備に尽きるわけです。教育の制度をはっきりさせないと、徒弟制度の延長ではどうしてもうだつがあらぬ。それにはやはり各種学校ではいけなくて、大学設置法に基づいた大学をつくり、学士、修士、博士といった人材を育てあげていかなないと、技師教育は技師の手で」という目標が実現されない。そこに至るまでのいわば助走として会員に一般教養的なことを含めた新しい専門知識を身につけさせようというので、いろんな生涯教育なり研修なりをかたちを変えて実施してきたわけです。当時医師会の会長であつた武見太郎先生には、公私にわたつてご指導いただいて大きなげみにもなり、いまもつて感謝の念を抱いています。また、医療界以外の人たちにもこの職業を知ってもらおうということから、学者や文化人といった方々を講師に招くなど、専門分野に固まらないように意識してやりましたね。

江間 四年制の大学は間違いなく実現するぞ、という確信を得た頃に全国統一講習会を実施しましたね。全会員の八割以上が参加したのだからすごいことでした。

中村 それは、大学ができれば大学に入った人はそれなりに進んで行けるわけですが、X線CTの登場以来MRや超音波といった新しい原理の装置機器が盛んに進化している時代でしたから、会員をなんとか救うために生涯教育に熱を入れたわけです。会員も大学を出てくるのも対等なんだ、というところまで持っていかなければいけない、というのがひとつの目標となつた。

江間 結果的にそれがMRや超音波の業務拡大とチーム医療、守秘義務を明記した平成五年の法律改正につながつていったわけですが、法律をそのように改正するから勉強しろとは一言も言わないで、結果的にそうなつたんですね。全国統一講習会が行われた同じ年に新しい教育センターが完成し、翌々年の平成三年に大学が開学したわけで、やはり大変な感激がありました。教育センターが先にできましたので、ときどき訪れて、大学の建築の進行状況を見るのが本当に楽しみでしたね。先生が先頭に立つて、工事現場をよく案内していただきました。

中村 大学ができるかできないかわかる前に、教育センターを先に作っちゃつた。これが大きな自信につながつた。

江間 それからわれわれだけじゃなく、他の医療職種に対するアピールにもなりましたね。

最後に、この本には一番大きなテーマがあるんですね。『明日への旅立ち』から一貫しておっしゃっているテーマ医療でもなんでも、基本的にははじめから技師法を抜本的に改正しなければいけないということに目標が向けられてきたと思います。大学や教育センターをつくったのも、講習会をやってきたのも全部その法律改正に向けてでしょう。

江間 そうですね。でもこの壁は厚いんですよ。

中村 しかし、それは実行する時期がもう来ていると思うんですよ。今度は法律改正一本に絞るべきだと思います。そのためにいるんなことをやってきたんですから。

江間 自分たちの身を正してね。

中村 本丸を攻めるためにはまず外堀を埋めなければいけない。そういう意味ではあらゆることをやって堀を埋めてきたから、いまではもう大体堀が埋まっているんです。だから本当に攻めることを考えるときは余分なことはやめて、本丸を攻めるのに没頭しなければならぬ。そういう意味では現状は心配なこともあるんです。

ひとつに、日本の医療もだんだんと変わりつつあるなかでも、最近はニュースで医療事故が盛んに取り上げられているわけですが、これがひとつに医療改革の後押しをしていく一端になっていくと思います。それにどう取り組むかというのが技師にとっても非常に大事だということは当然です。私が心配するのは、在任中に発足させたわけですけれども、賠償責任団体保険の加入制度、これが実は内心抵抗があった。ああいう保険制度をつくるということは、技師は事故を起すということを前提に考えているわけですね。その前提の前にかに患者を大事にするかということが徹底されれば、ああいう保険の制度というものは必要がなくなるわけですよ。それを言わずに、保険制度をつくって事故が起したらくら保障するというのは、これは本末転倒だと思った。逆行しているという感じを持つんです。ああいうものを先行したということは、技師の業務には事故が起るんだということを前提にしている。事故が起るといのは、医師が患者のことを思っていないから起る。医師がそうだから技師もそうだといふふうには思っている。事故が起るといのは間違いだ。医師はそうであっても技師は患者のことを思っているから医療事故というのは起りっこないんだということに徹すればいい。

もし仮に、そこまで技師が患者の側に立つて安全に徹し、事故のない実績がつくり上げられれば、専門職としての独立性をより明確にアピールすることができるはずです。そういうふうに、医師はそうでも技師は違うんだというはつきりしたポリシーがどこかにないと、それなら技師も医師になつたらいいじゃないかとさえ言いたくなる。医師法に実があるなら、どんな事故だって医師が責任を負えばいい。それを看護師が現に捕まったりしているのを見て、どうせ医師が責任をとらないのなら自分たちも保険をかけようという発想でやっている。有名無実の医師法という本丸を攻めないで、小さい陣地をつくってそこへ逃げ込もうという発想は間違っていると思う。やはり専門職として自分たち技師はこうあるべきだというポリシーを持っていないと、結果として医師に追隨し医師法の温存に手を貸すことになってしまい、方向を誤ってしまうという気がする。

それで結局いまでは、会員も技師法改正はもうどうでもいいよというような発想で、皆さんが安易な気持になっている。結局私の攻め方がまずかったかなと思つてくれ、私は一貫して堀を埋めていくんだと、目的は本丸にあるんだと言つてやってきたんだけど、会員は堀が埋まってしまうとそれきり本丸のことを忘れてしまった感じですよ。

私が引退するのも、これはいくらやってもこの会はもうついてこないなという感じを持ったからだということも事実です。これだけやっても、会員の人たちは本丸に攻めることを忘れてしまつて、もういいよと言う。もう何もせんでもいいよ。このままにして行つてくれという気持ちに会員がなつてしまつていた。それよりも、身近な事故が起つたら誰が保証するのかという、そんな本論を忘れた方向に向いてしまつた。だから肝心の会員の人たちはその本丸に攻める力がなくなつてしまつた。要は、日常の仕事で満足してしまつていのが現状だなという感じを最後に持ったわけですよ。と大事な本丸がある。それにはやはり、国会議員とか政府の関係に対しての接触がいままで以上に必要になつてくる。

江間 先生がもし徳川家康だとすると、さあそこまでやってきたんだから、あとは秀忠かなんかにハツパかけているのと同じようなつもりでやってくれればいんだだけでも。

中村 しかし、技師法改正は遠のくでしょうね。

江間 だけどこの本を読んで、会員が真剣に熟読すれば、これから自分たちは技師法改正を目的として、どういう方向

に行けばいいのかということが、ある程度示唆されているんじゃないかと思うんですよ。いろんなヒントが入っています。要するに、この本は昔話をしている内容なんかじゃなくて、実際読むとリアルタイムでその時代その時代をリアルに生きる現代に直結するテーマが詰まっているわけで、そのまま最後のあたりから、じゃあどうするんだという、読んだ人の宿題に通じているんです。単なる歴史じゃないんです。ずっと一本の線がつながっていますから、その線をたどっていけば自分のやることがわかってくると思うんですが、どうでしょう。

中村 医療界自体がとにかく独特の封建的な性格が色濃くて、いま世間からそれは非難されて医療不信とかたちで出ていますけれどね、そのなかで幸いにもここまでやってきて、あとはお前たちやれよと突っぱねたかたちでやめるわけですから、中村は中村個人、会員は会員個々人ということで、非常に難しいなという感じを持つわけですけれどね。

江間 その中村という個人に皆がある程度理解を示したからこそ、頼りない会員ばかりかもしれないけれども、曲がりなりにここまで成長してきたんだから、そこをやはりもう少し認識してもらってね。

しかし私は、これを読む会員が一番何が得られるかというところ、エネルギーだと思っんですよ。専門職としてのプライドとも言えるし、患者さんに対する医療人としてのプライド、チーム医療としての医療人のありよう、そういうものが全部エネルギーとして事業につながってきているじゃないですか。そのエネルギーをもらってくるといいなと思っんです。それとこの本を読んでいただければ、ある程度技師会の姿勢とか先生の努力がわかってきて、それと同時にこれからどうやって進むべきかということにヒントを与えてくれる内容だと思っつ。

会長を三五年やってこられたということは、私もずっと一緒に見ていて、やはり技師の医療界における役割、これがきちんと確立したものでなければならぬという精神できたわけで、この本にはそれが全編に貫かれています。いわゆる技師の役割をはっきりさせると。だから最後には、いまの技師という立場が崩壊してもそのことをやらなければいけないんじゃないか。この三五年間その役割を確立させるために、先生はこれだけ努力されてきたんじゃないかと思っつ。平成八年にISRRITから『技師の役割』という本が出て、日本の技師会もそれを受け入れて総会で採択しましたけれども、果してこの役割がどれだけ実践されていくか、これが先生の究極の悲願だと思っつましたね。

若手の会員の人たちとお付き合いする機会が多いんですが、そういう人たちには先生の言うことがよくわかっている、あるいは意を体現していらっしやる方が結構いらっしやいます。そういう実感を持っているんです。ただ、そういう人たちはあまり先生のところへは来ないし、よけいな発信もしないで、ただ黙々と先生の示された展望を内に秘めながら仕事に打ち込んでいると思うんです。

江間 先生は厳しいから、楽観的なことは言われぬ。それは逆説と思っていいですよ。会員があまり理解してくれなくて困ると言っているのは、「お前たちそろそろわかってくれたらうな」と思ってるんだというふうに解釈できるわけだね。そう私は思いますよ。だから、この本は若い人をはじめできるだけ多くの人に読んでもらえるようにしたいですね。

中村 できるだけ多くの人に読んでもらえるようにするのは出版社の責任だよ（笑い）。

（二〇〇二年二月二十八日収録（司会・文責）古屋敷信一）

